

王国維の文学普遍論

—ゲーテ「世界文学」との比較から—

小 島 明 子*

The Universal Theory of Literature on Wangguowei

: through a comparison with Goethe's "Worldliterature"

KOJIMA Akiko

abstract

This paper discusses Wangguowei's literary theory in comparison to that of Goethe's, as the similarities and differences of these two authors have not been yet discussed. Wangguowei claimed that literature that is written by a great poet should express emotions common to all humanity and Goethe emphasized the importance of "Worldliterature."

In order to clarify the similarities and differences of these two authors, I compare them from three perspectives: (1) how they view the world; (2) how they view synchronicity and diachronicity of literature; and (3) what their attitudes are towards translation.

I argue that (1) their world views are different and (2) that Wangguowei placed importance on diachronicity and that Goethe placed importance on synchronicity and (3) that translation for Wangguowei was a means of absorbing foreign culture whereas for Goethe it was a vehicle of dialogue among writers of the world.

In conclusion I considered the sources of their similarities to argue that the rising tide of colonization and globalization that the two shared is the source of their similarities. I also argued that their differences comes from the extent of their experiences with foreign cultures.

Keywords : Wangguowei, the universal theory of literature, Goethe, "Worldliterature", human

1. 序論

王国維の「人間嗜好の研究」(1907年)には「もし真の大詩人であればまた、人類の感情を一個人の感情として表すことができる。」¹と述べられている。このような古今東西へ向けられた「人類」的な視点は、王国維のみならず民国以降の文学論においてしばしば認められることは前稿で述べたとおりである²。しかし、王国維以前の中国においては稀であったため、西洋文化の影響が考えられよう。

たとえば、ショーペンハウアーは「真の詩人」について次のように述べている。

真の詩人の抒情詩においては、全人類の内面が写しとられ、過去、現在、未来にわたる幾百もの人々が常に繰り返される状況のなかで感じてきたこと、またこれからも感じるであろうことが、適切に表現されてい

キーワード：王国維、文学普遍論、ゲーテ、「世界文学」、人類

*平成20年度生 比較社会文化学専攻

る³。

(『意志と表象としての世界』第3巻第51節)

これは王国維が「真の大詩人」について述べた右の一節に符合するため注目すべきである。王国維はドイツ哲学、とりわけショーペンハウアーを愛好したため、影響関係が指摘されよう。

しかし実のところ、ショーペンハウアーにおける「人類」的な文学観は彼独自のものではなかった。たとえば、同時代のゲーテは「詩は人類の共有財産」などと述べたが、この言はゲーテの「世界文学」の理論の一環として近年盛んに研究されている。ゲーテが「世界文学」を提唱したのは晩年(1827年以降)であったため、ショーペンハウアーの上記の発言(1818年)よりも十年ほど遅れるが、王国維に先んずる世界の文学状況としては注目に値する。

さて、ショーペンハウアーはかつてゲーテに師事していたため、この両者の間に共通点が認められることは不思議ではない⁴。しかし、王国維の研究においては従来ショーペンハウアーが殊に脚光を浴びてきた一方で、ゲーテに関してはほとんど論究されてこなかった。唯一、「紅樓夢評論」(1904年)に見られる『ファウスト』への言及はショーペンハウアーの「受け売り」と解釈されてきたが⁵、王国維とゲーテの比較を真正面から扱った研究は寡聞にして知らない。ショーペンハウアーなどの哲学者たちと比し、ゲーテは王国維と同じ詩人という立場でありながらも、王国維との関係性はまったくのところ謎に包まれたままであったといえよう。

そこで本稿では「人類」的な文学思考を切り口に、両者について論じたいが、しかしその前に、王国維におけるゲーテの直接的な影響について少しふれておこう。王国維がゲーテについて言及した著述は「紅樓夢評論」以外にも二点(1904年「ゲーテの家庭」・「ドイツ文豪ゲーテ・シラー合伝」⁶)存在する。これらの内容からは王国維がゲーテに関して広範な知識を有していたことが知られるが、「世界文学」を認知していたという確証はつかめない⁷。したがって、王国維が冒頭の一節にあたりゲーテを意識していた可能性はほぼ否定される。しかし、仮に直接的な影響がなかったにせよ、このことは同時に両者の比較の意義をも左右するものではない。そこで本稿では非影響論を前提とし、まずはゲーテの「世界文学」とは何かを明確にした上で、両者の文学観における数点の特徴を取り上げ、共通点と相違点を明らかにしたい。

なお、王国維に見られる「人類」的な文学観にゲーテの影響の可能性を初めて指摘したのは蔣英豪であった⁸。しかし、彼の言及はきわめて補足的なものであり、王国維とゲーテに関する具体的な検証にもとづくものではなかったため、ここでは注記するにとどめる。蔣は冒頭の「人間嗜好の研究」の一節を王国維の「文学大同思想」と称していたが、王国維の思想は同時代人、康有為のいわゆる「大同思想」とは一線を画するため、本稿では混同を避けるべく「文学普遍論」と称したい。加えて、本稿で論ずる「世界文学」とはゲーテの提言したそれであることをはじめに断っておく。

2. 本論

まず冒頭で紹介した王国維「人間嗜好の研究」の一節には、「真の大詩人」の創作は「人類」的であるとの見解が述べられていたが、その翌年(1908年)に発表された『人間詞話』における李煜への評価もまた、こうした「人類」的な観点にもとづくものであった。

ニーチェがいうには、「あらゆる文学において、私は血によって書かれたものをもっとも愛する。」(南唐後主)李煜の詞はまさにいわゆる「血によって書かれたもの」である。(北宋第8代皇帝)徽宗の「燕山亭」の詞もまたこれに類する。しかし、徽宗の詞は身の上や世間の憂いをみずから訴えているにすぎないが、李煜の詞にはまるで釈迦やキリストのように人類すべての罪悪を一身に背負う思いが感じられるため、それらの詞が包摂する大きさは必ずや異なるであろう⁹。

ここでの「人類」とは、釈迦やキリストをも含めた広範な人種を意味しており、王国維の文学における東西不問の姿勢が窺える。これに対してゲーテの「世界文学」はどうであったか。

しかしその前に、「世界文学(Weltliteratur)」とは何か、という根本的な定義を明らかにせねばなるまい。というのも、そもそもゲーテ自身が「世界文学」について定義を下していないからである。現在に至るまで定説といえるものはないようであるが、「世界文学」にまつわるゲーテの数々の発言から、その全貌を推察することができる。まずは次の一節を見てみよう。

近頃いろいろな本を読んだ。とりわけ中国の小説はまだ読みかけだが非常に注目に値するようだ。(中略)人間の思考や振る舞いや感覚は我々とほとんど変わらないから、読めばすぐに、自分も彼らも同じ人間だということが感じられてくる。(中略)最近いよいよわかってきたのだが、とゲーテは言った。詩とは人類の共有財産であり、あらゆる国、そしていかなる時代においても、幾百とない人間により生み出されるものなのだ。(中略)我々ドイツ人は、我々自身の狭い世界から脱しなければ、ペダンティックなうぬぼれに陥ってしまうだろう。だから、私は好んで他国民の書を渉猟し、他人にもそうするよう勧めているのだ。国民文学は今日ではあまり意味がない。世界文学の時代にきているのだから、皆がこの時代の促進のために尽力せねばならない¹⁰。

(エッカーマン『ゲーテとの対話』1827年1月31日)

ここでは「詩とは人類の共有財産」であるというように、世界人類に共通する普遍的なものを表現した文学と、ひとまずは解釈できる¹¹。ゲーテは詩人に特殊でありながらも普遍的、人類的なものを表現するよう要請している。そしてゲーテのいう「人類」とは、中国、ひいては東洋をも含んだ世界的な規模の概念であったことは注目したい。ゲーテは中国の文学をも渉猟し、自国の文学との共通点、ひいては人類における共通点をも見出していた¹²。これはおよそ、西洋の知識を広範に求めた王国維が先の「人間嗜好の研究」において、真の詩人は人類に共通する感情を詠うと述べていたのと軌を一にする。

しかし、両者の本質的な相違は認めざるをえない。

第一には、王国維とゲーテの思い描いていた「世界」観の相違である。ここでは「世界文学」に関する後世の研究のうち、先駆的役割を果たしたモオルトンの説を紹介したい。

私は全世界の文学と世界文学とを区別している。全世界の文学はただすべての文学の総計を意味するに過ぎない。世界文学は、私のこの語の用法にもとづけば、この全世界の文学を一定の観点から、おそらくは観察者の国民的立場から見たものである。(中略)さらには、世界文学は同国民の異なる個々によっても違ってくるかもしれない¹³。

モオルトンは右において「世界文学」を「全世界の文学」と区別しているが、これによれば、「世界文学」における「世界」の規定はそれぞれの国や個人によって異なるという。

さて、ゲーテは先の一文(前掲『ゲーテとの対話』1827年1月31日)において明らかに中国文学をも意識していたものの、一方ではこれと反する記述も確認される。たとえば、「ヨーロッパ文学、いな、普遍的世界文学」「ヨーロッパ文学、すなわち世界文学」あるいは「一つの普遍的ヨーロッパ文学または世界文学」と、「世界文学」=「ヨーロッパ文学」としている箇所との矛盾である¹⁴。橘忠衛はこの問題に対し「普遍的交渉圏としての世界文学が事実においてはまだヨーロッパとしてしか体感されていなかった」¹⁵と解釈している。

そもそも「世界」とはいつても、モオルトンが指摘するように、結局は「観察者の国民文学的立場から見」るよりほかに、各人が置かれた環境や個人の知識によりその規定には差異が生ずる。王国維とゲーテの「世界」観の実質的相違もひとつにはここに起因するものと思われるが、両者の差異は現代の我々が感じる諸国間のそれよりもさらに深いものであったことは想像に難くない。

第二には、ゲーテのいわゆる「世界文学」と「国民文学」の関係性における、王国維との認識の相違である。ゲーテは、

われわれはそれぞれの国民の特殊性を認め、他でもなくそれによってそれぞれの国民と交流するために、まずその特殊性を知らなくてはならない。なぜならば、一国民の独自性とはその言語や貨幣のようなものであって、それにより交流が容易にされるのみならず、それによりはじめて交流が完全に可能となるからである¹⁶。

(1827年『ドイツ小説』)

と述べており、「国民文学」を「世界文学」に不可欠な条件としている。しかし、先に見たエッカーマンとの対話においては「国民文学は今日ではあまり意味がない」と軽視していたため、「国民文学」はそれ自体としてよりはむしろ「世界文学」に至るプロセスとして重視されていたようである。もちろんゲーテも「模範的なものがどうしても必要になった場合は常に古代ギリシャに立ち返るべきである」(前掲エッカーマンとの対話の前後)とヨーロッパの古典に相当の権威を認めており、自国の文学の淵源に対して無関心であったわけではない。しかし、自国のドイツ文学に対する特別意識や伝統意識は希薄であるため、通時性よりは共時性、「同時代性」を最も重視したと評されている¹⁷。

一方で王国維はどうであったか。王国維においてもまた世界的視点がなかったとはいえない。自らを西洋の名作家に列し、国内のみならず世界的に名を馳せる文学者としての抱負が語られることもあった。彼は哲学から文学へ転向した理由について次のように述べている。

近年の嗜好が文学に移ったのにもまた理由がある。それは填詞の成功である。私の詠んだ詞はまだ百関には至らないが、南宋以降では一・二人を除き私に比肩する者はいないと日々確信している。五代・北宋の大詞人と比べてしまえば私も及ばぬ所があるとはいえ、彼らもまた私に及ばぬ所がないわけではない。填詞の成功により戯曲をも志すようになったのもまた、最近抱く分不相応な願望である。(中略)わが中国文学で最も振るわないのは戯曲において他にない。元の雜劇、明の傳奇は今日数百と残っており、そのなかには文章の優れたものもあるが、理想と構成は極めて幼稚で拙劣と言わざるをえない。清朝の作品にはやや進歩が見られるとはいえ、西洋の名劇の数々と比べてしまえば道のりは遠い。これが私が自らの無能を顧みず、ひとり戯曲を志した理由である¹⁸。

(1907年「自序二」)

右によれば、王国維には西洋の名劇と比しても遜色のない作品を世に残したいという願望があった。もっともこの夢が実現されることは生涯遂になかったが、中国の文学を代表する世界的な創作を目指していたことは注意したい。

しかし、ここでさらに顕著に窺えるのは国民文学者としての自覚である。我こそは古の「大詞人」に比肩し、文学史上名を連ねるといった自負である。王国維はこれより先(1904年)、「教育偶感四則」(『静庵文集』)でも西洋に匹敵する「古今の大著述」を生む必要性を説いているが、それはむしろ「民族的自覚」にもとづくものであったという¹⁹。

王国維における同民族との連帯意識は彼の作品中にも散見する。たとえば次の詩では、古人との連帯感が色濃く看取される。

身を天地に側て拘攀を苦しむ、姑射の神人未だ攀るべからず。雲は無心なるが若く常に淡淡たり、川は競はざるが如く豈潺潺たらん。懐を馳す敷水条山の裏、意を託す開元武徳の間。終古の詩人太だ頼る無く、苦だ楽土を求めて塵寰に向かふ²⁰。

(1899年「雑感」)

この世のしがらみから逃れるべく仙人になることを願ったもののいまだに叶わない。雲はまるで無心であるかのように常にゆったりと空に浮かんでいる。また川はまるで争うことなくどうしてさらさらと流れているのであろう。隠居の地を羨望し、安泰であった古の時代に思いを馳せてはみるものの、古来詩人はよるべなく、煩いなき世界を夢見ては俗世と向き合ってきた。

第1句「側面天地」は天地に身を置くことであるが、杜甫に「身を天地に側て更に懐古し、首を風塵に回らし息機を甘んず。」(「將に成都の草堂に赴かんとする途中作有り、先づ巖鄭公に寄す」)²¹と、隱棲の立場を詠んだ例がある。第2句「姑射神人」は『莊子』「逍遙游」の「藐姑射の山、神人の居る有り、肌膚は氷雪の若く、渾約として処子の若し。」²²により、仙人を指す。第3・4句は陶淵明に「雲は無心にして以って岫より出で、」(「歸去来」)、杜甫に「水流れて心競はず、雲在りて意俱に遅し。」(「江亭」)²³と類似した表現が見られる。第5句「敷水」(「条山」(中条山))はともに古来隱棲の場であり、唐詩などで詠まれてきた。第6句「武徳」は初唐はじめ高祖の世、すなわち618~626年。「開元」は盛唐前半、玄宗帝の世、すなわち713~741年。ともに唐の最盛期であるが、詩中では現実の苦境から希求される過去のユートピアとして詠まれてきた。たとえば杜甫の詩句には「武徳開元の際、蒼生豈重ねて攀ぢらん」(「歎有り」)²⁴とある。

以上から、第7句「終古の詩人」とは具体的には詩句から連想される杜甫をはじめとする唐代の詩人たちを指し示したものと思われる。しかし、隱遁や昇仙への憧憬は中国の詩詞におけるひとつの典型であったため、必ずしも杜甫のみに限定される傾向ではない。よって、ここでは漠然とした古人の集合体と解される。

右のごとく王国維の詩詞には常套的な詩(詞)語や典故が多く見られることから、「過去の詩(詞)人、先行する詩(詞)をただちに想起させる作品が極めて多い」²⁵とも評されている。もちろん、典故を用いる創作法は中国においては一般的であったため、王国維独自の特徴とはいえないが、このような詩(詞)作の伝統を背景に、王国維に至っては古人との連帯感がより一層高められていることは否定できない。たとえば、王国維が詞中で多用し、後に号として自身の詞集や詞話の題にも冠した「人間」は、厭世の立場から「この世」や「世間」を指す伝統的な詞語であった。筆者は前稿において、王国維の「人間」に反映された連帯意識が古人のみならず人類全

体にまで及んでいたことを述べたが²⁶、しかしその底辺に流れる古人とのつながりは依然として揺るぎないものであったことは認めざるをえない。

このことから、ゲーテが思い描いていた他者との連帯感が、とりわけ同時代の世界各国とのつながりであったのに対し、王国維の場合は古人とのつながりであったといえる。王国維においては共時性よりは通時性、「世界文学」よりはむしろ「国民文学」的なスタンスが基盤になっていた。

そこで、両者の相違点のうち第三の問題として挙げられるのが、翻訳に対する態度についてである。まずはゲーテの考えを引用しよう。

すべての翻訳家は、この普遍的精神的交易の仲介者として努力し、その交易を促進することを自らの商業力として見られるものとする²⁷。 (1827年『ドイツ小説』)

ゲーテによれば、翻訳家は他国間同士の交易における「仲介者」であり、「世界文学」とは翻訳に耐えうるものでなければならなかった。そして彼自身も創作にあたっては翻訳により外国で評価されることを目標としている。ただ外国で普及するのみならず、異なった価値観による批評にも耐えねばならなかった。真に価値のある普遍的な文学であれば、翻訳され受容されることにより新しい価値をもつのであり、逆にいえば、翻訳という過程を経て異文化に輸入されても通用し、かつ新しい価値を付与されてこそ「世界文学」にふさわしいということになる。あるいは「世界文学」とは一種の「文学」ではなく、このような翻訳や批評をも含めた文学活動のことであり、近年では解釈されている²⁸。

これに対して王国維にとっての翻訳とはいかなるものであったか。王国維の翻訳に関する言及を挙げるならば、たとえば、「新学語の輸入を論ず」（1905年「論新学語之輸入」『静庵文集』）では、外来書、とくに形而上学分野の輸入に応じて導入された新語の問題について論じている。そもそも王国維自身、日本へ留学後、『教育世界』（1902年創刊）などに多数の翻訳を掲載しており、外国文化を中国に紹介する業績を数多く残している。したがって、「世界」へ向けられた国際的な視野、そして翻訳に対する意気込みという点においてはゲーテと比して遜色はない。

しかし、王国維が翻訳の必要性についてゲーテのように特述した例は見られない。また、両者の翻訳に対する態度は必ずしも一致していない。ゲーテにとっての翻訳とは、自身の、あるいは他の作家の作品が外国で受容され、「国民文学」から「世界文学」として昇格するための手段であった。それに対して王国維にとっての翻訳とは、外国の学問を摂取するための手段であった。また、ゲーテの場合は世界における文学に関する対話や学び合い、世界的な文学活動の促進、世界における文学、ひいては芸術の向上のためであったが、王国維の場合は教育や思想界における西洋文化の一方的な摂取のためと、ベクトルの向きは大きく異なる。特に、王国維が翻訳した外国書のジャンルは幅広いものであったが、農学、哲学、倫理、思想の類に属し、いずれも文学とはいえなかったことも注意したい²⁹。また、王国維が自ら翻訳業に従事していたのに対し、ゲーテが翻訳の仕事に直接携わることはほとんどなかったことも両者における決定的な相違といえる。

最後に、両者の特徴について付言するならば、王国維における連帯感とは確かに人類に普遍的なものを意味していたとはいえ、それを実際に世界に問うことを必ずしも要してはいないことである。自身や自国の文学が外国でいかに受容されようとも関係なく、他国に普及させることは問題でない。実際に世界的な対話を行うことは論外である。王国維の詩詞や文学評論において「人類」的と見なされたものとは、翻訳され世界で批評された経歴をもたない、主観的で漠然とした一体感であった。この意味において王国維の文学普遍論は概念上のものであると同時に、閉塞し「ペダンティックにうぬぼれ」た国民文学と言わざるをえず、「普遍性」や「連帯」という名のもとに実質の伴わない空虚な感が否めないのである。

3. 結論

以上のように仔細に検討してみると、王国維における文学普遍論はゲーテの「世界文学」とは本質的に異なり、同一とは即断できないことが結論される。特に他者との連帯感においてゲーテが共時性を重んじたのに対し、王国維が通時性を重んじたことは決定的な相違といえよう。しかし、両者の性質はもとより異なるとはいえ、文学における普遍的、人類的な視座、そして翻訳の重視という点においては共通した認識があったことは否定できな

い。そこで、仮に王国維がゲーテの「世界文学」を意識していなかったとすれば、逆に両者の性質に一致した側面が認められる原因は何であったかを追究する必要がある。

この可能性の一つとして本稿で提示したいのは、両者が置かれていた時代背景である。まずはゲーテが「世界文学」発生契機を語った次の一節を紹介しよう。

普遍的な世界文学が話題になってからすでにいくらかが経つが、そのことは確かに正当と言えよう。なぜならば、すべての国民は恐ろしい戦争によって互いに震撼させられ、それから再びそれぞれに立ち戻ることに、多くの外国の物事に気づかされ、これを自らの内に受け入れることにより、これまで知らなかった精神的欲求を至るところに感じるようになったからである。そのなかから親密な感情が芽生え、従来自ら閉鎖してきた代わりに、多かれ少なかれ、徐々に自由な精神的交易に踏み出したいと願うようになったのである³⁰。

(1830年、トマス・カーライル『シラーの生涯』の序文)

上記で述べられているのは、具体的にはフランス革命やナポレオン戦争などによりドイツの国民が震撼させられ「世界」を意識せざるをえなくなった時勢である。また、エッカーマン『ゲーテとの対話』1827年2月21日ではパナマ運河、ライン・ドナウ運河、スエズ運河の開通を見たいとの抱負が語られている³¹。欧米が植民地を占拠し外国の脅威にさらされる反面、交通機関が発達し世界との交易が日ごとに盛んになってゆく時代に身を置くことで、ゲーテは「世界文学」の着想を得るに至った。

一方、清末から民国初期、特に王国維が冒頭の一節を記した1907年前後の中国の状況はどうであったか。大まかな外交史を概観するだけでも、1840年のアヘン戦争以来、英仏戦争、清仏戦争、日清戦争などでの敗北を連続的に経験している。結果、度重なる列強の侵略への反発から1900年には義和団事件が勃発し、王国維の所属していた東文学社も動乱のためにその翌年解散している。また、これより先、1899年には、王国維は変法を主張する梁啓超が設立した『時務報』館に就職している（「自序」）。この頃、許同蘭宛に送られた書簡の文面には中国の植民地化に対する危惧が記されていることから³²、時局に動揺せざるをえなかった周辺状況が察せられる。

折しも、嚴復がハックスレーの著を翻訳し（1898年『天演論』）、生存競争による中国の危機と富国強兵の必要性を説いたことは王国維に多大な影響を及ぼした。1905年「近年の学术界を論ず」では、嚴復の説は純粋哲学上の議論ではなかったと批判し、その上で学術の政治からの独立を説いている。そして西洋文化摂取の必要性について次のように述べている。

以上のことから、思想上のことは中国は中国により、西洋は西洋によるべきとも思われるが、これもまたそうではない。それはなぜか。人々は知力を等しく持っているが、宇宙や人生の問題は誰しもが解明することができないからである。だから、もしこの問題の一部を解き明かすことができるのであれば、自国から出たか、外国から出たかは問題ではなく、もし我々の知識上の要求に応じてくれ、我々が疑念を抱く際の苦痛を和らげてくれるのであれば、それは（中国も西洋も）同一である。（中略）したがって、わが国の今日の学术界は、一方では中国と外国を分ける見方を捨てねばならない、（後略）³³。

以上のように、外国の侵略により「世界」というものを意識せざるをえなくなったと同時に、「国民」が主体性をもちはじめ、ナショナリズムが芽生えた時期であったことは、中国・ドイツ両国における執筆背景として指摘できよう。このような同時代性は、王国維とゲーテがともに文学において「人類」に普遍なるものを目指したことと決して無関係ではあるまい。

しかし、ここで両者の立場に決定的な差異も指摘できる。それは、外国の存在が両者個人においていかほどまで影響を及ぼしたかという点である。

まず政治的立場について言及すれば、王国維は古代の文人とは異なり、所謂官僚ではなかったため、政治に関与することは生涯を通じてほとんどなかった³⁴。これに対してゲーテは作家であると同時に歴とした官僚であり、一時は枢密院顧問官として外交を司るほど、政治の中枢にいた。従軍経験もあり、敵将であるナポレオンとも幾度か謁見している³⁵。つまり、異国の脅威を文字通り目の当たりにしていたのである。

もうひとつは外国体験の質量である。ゲーテは生涯にわたり、イタリアをはじめとするヨーロッパ各地に遍歴を重ねていたため、彼の行動範囲やそれに従う見聞の広さは注目に値する。文学の分野においても現実に根ざした実理的な理論が構想されたことは彼にとっては必然的な結果であったと言えよう。一方で、王国維は前後五年ほどの渡日経験をもつものの、それを除いては、生涯自国の国境を超えることはなかった。実際的なレベルで接

した異国は日本に限られる。よって、ゲーテと比較した際、異国体験の乏しい王国維においては、たとえ彼の関心が人類レベルの共感に至っていたにせよ、依然として閉塞感が否めず、中国の伝統枠を打破できなかった印象がある。

そして両者における国民意識の差異をさらに追究すれば、畢竟、各々が生まれた母国が有するところの伝統の比重、歴史の厚みといった相違に帰着するであろう。

本稿では、王国維における文学普遍論とゲーテの「世界文学」について、非影響論の立場から比較をわずかに試みたが、議論の余地は多い。国境を超えた流動的な対話を促進させることは、国際社会においてのみならず、文学研究の場においても今後の課題であると言えよう。

注

- 1 「人間嗜好之研究」に「若夫真正之大詩人、則又以人類之感情為其一己之感情。」(『静庵文集統編』。なお本稿で引く王国維のテキストは、特に注記しない限り、『王国維遺書』上海書店出版社、1983を底本とする。但し標点および傍線は筆者。以下に同じ。)
- 2 拙稿「王国維の『人間』について—連帯としての『ジンカン』と『ニンゲン』—」(『お茶の水女子大学中国文学会報』28、2009、6頁。)では、周作人、茅盾、胡愈之、郭沫若にも、個人による文学が人類全体を代表しているとの言及が見られることについてふれた。
- 3 Arthur Schopenhauer: *Die Welt als Wille und Vorstellung*. Leipzig, Brockhaus, 1873, 4. Aufl. Bd.1, Drittes Buch, S.294.
- 4 ゲーテとショーペンハウアーの交流については、遠山義孝『ショーペンハウアー』清水書院、1996、第6版「I ショーペンハウアーの生涯」に詳しい。
- 5 たとえば、伊藤漱平訳『紅樓夢評論』(『中国現代文学選集 1 清末・五四前夜集』1963、平凡社。)の「解説」371頁や「注」381・389頁、「補注」412頁に詳しい。
- 6 「格代之家庭」[德国文豪格代・希爾列爾合伝](姚淦銘・王燕編『王国維文集』第3巻、中国文史出版社、2007参照。)
- 7 1907年以前、「世界文学」についてすでに言及していた文献の数は限定される。まず、ゲーテ自身が「世界文学」を発言した20数箇所の出典については、小岸昭訳「世界文学論」(『ゲーテ全集』13巻「文学論」潮出版社、1980。)およびFritz Strich: *Goethe und die Weltliteratur*. Bern, Francke, 1957, 2. Aufl. (1945初版)“Anhang”で指摘されている。また、研究書では独書に5点(Goedeke Karl: *Goethe und Schiller*. Hannover, Lifsä Ehlermann, 1859, S.275., Karl Heinemann: *Goethe*. Stuttgart, Alfred Kröner, 1922, 5. Aufl. (1895初版) Bd.2, S.279., Richard Moritz Meyer: *Goethe*. Berlin, Ernst Hofmann, 1895, S.579., Eugen Wolff: *Goethes Leben und Werke: mit besonderer Rücksicht auf Goethes Bedeutung für die Gegenwart*. Kiel, Lipsius & Tischer, 1895, S.263., Richard Moritz Meyer: *Die Weltliteratur und die Gegenwart*. In: *Deutsche Rundschau*. Bd.104, Berlin, Gebrüder Paetel, 1900.), 英訳に1点(Heinrich Düntzer, *Life of Goethe*. Thomas William Lyster tr. Macmillan, London, 1908, 2. ed. (1883初版), p.675.)確認できる(これらのうち、マイヤー著は「世界文学」に関する唯一の専著。)が、王国維のゲーテに関する論文中には、これらの著を目にしてきたことを裏付ける記述が見当たらない。
- 8 蔣英豪「王国維与世界文学」(『復旦学報(社会科学版)』1997、第2期、103頁。)に「真正之大詩人、則又以人類之感情為一己之感情、更進而欲發表人類全体之感情。彼之著作、實為人類全体之喉舌。王氏の文学大同思想、可能受他所崇敬的德国作家歌德影響。(中略)歌德又堅信『只有屬於全人類の文学才是真正有價值的文学。』歌德的文学大同思想对王国維可能会有所影響。」とある。ただし、この論題に見える「世界文学」とは、ゲーテのそれを特別に意識したものではない。
- 9 「尼采謂、一切文学、余愛以血書者。後主之詞、真所謂以血書者也。宋道君皇帝燕山亭詞亦略似之。然道君不過自道身世之戚、後主則儼有釈迦基督担荷人類罪惡之意、其大小固不同矣。」(『人間詞話』)
- 10 Johann Peter Eckermann: *Gespräche mit Goethe, in den letzten Jahren seines Lebens*. Heinrich Hubert Houben hg. Wiesbaden, Friedrich Arnold Brockhaus, 1975, Erster Teil, S.172-174.
- 11 ここでは「小説」に関する言及から直接「詩」に関する定義に到っているが、それは、ドイツ語の「詩(Poesie)」とは小説をも含む広義の詩のことであり、韻によって作られたすべての文学ジャンルを指したためである。たとえば、ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』第3巻第51節(注3前掲書、S.293.)では、「詩」を「抒情詩」「物語詩」「田園詩」「小説」「叙事詩」「戯曲」に分類している。なお、「世界文学」を「世界人類に共通する普遍的なものを表現した文学」とした筆者の解釈は、木村謹治「ゲーテに於ける世界文学の概念規定」「ゲーテと世界文学」(『ゲーテ』弘文堂書店、1938)の見解にもとづくが、後述する通り近年ではこれに異議を唱える研究者も多い。
- 12 ただし、文中で述べられている「いま読みかけのシナの小説」が具体的に指しているのは、福田英男「ゲーテと中国文学」上・下(『東北学院大学論集。一般教育』71、1981、19頁・同72、1981。)によれば、Peter Perring Thoms によって英訳された韻文小説『花箋』であり、ゲーテが目にしたものはこれを含めてみな「本来文学的には必ずしも高い価値を持っているとは言えな」かったようである。
- 13 Richard Green Moulton, *World Literature and Its Place in General Culture*. New York, Macmillan, 1911, p.6-7.

- 14 八木昭臣「ゲーテと『普遍の世界文学』」(『熊本学園大学文学・言語学論集』5(1)、1998、56頁。)に、前掲注7シュトリヒ著の「付録」に挙げられた二つの例“Die Zusammenkunft der Naturforscher in Berlin, 1828.” (Anhang, 12) “Schema zu Kunst und Altertum. Sechsten Bandes drittes Heft, 1829.” (Anhang, 16) と、“Weimar. 1829. August 12. W. Häring.” In Freiherr Woldemar von Biedermann: *Goethes Gespräche*. Leipzig, Hess & Becker, 1910, 2. Aufl. Bd.4, S.143. に見られる「世界文学」と「ヨーロッパ文学」の混同について指摘されている。
- 15 橘忠衛「ゲーテの〈世界文学〉」(『火炎の車』英宝社、1965、66頁。)
- 16 *German Romance*. Volumes IV. Edinburgh, 1827. In *Goethes sämtliche Werke: vollständige Ausgabe in sechs banden*. Stuttgart, Cotta, 1855, Bd.5, S.697.
- 17 菊池栄一「ゲーテの『世界文学』」(『比較文学研究』第2巻、第1号、1955。)
- 18 「自序二」に「近年嗜好之移於文学、亦有由焉、則填詞之成功是也。余之於詞、雖所作尚不及百闕、然自南宋以後、除一二人外、尚未有能及余者、則平日之所自信也。雖比之五代・北宋之大詞人、余媿有所不如、然此等詞人、亦未始無不及余之處。因詞之成功、而有志於戲曲、此亦近日之奢願也。(中略) 吾中国文学之最不振者、莫戲曲若。元之雜劇・明之傳奇、存於今日者尚以百數、其中之文字、雖有佳者、然其理想及結構、雖欲不謂至幼稚至拙劣不可得也。国朝之作者、雖略有進步、然比諸西洋之名劇、相去尚不能以道里計。此余所以自忘其不敏、而独有志乎是也。」(『静庵文集統編』)。
- 19 井波陵一「躍動する精神—王国維の文学理論について—」(『中国文学報』42、1990、130頁。)では、王国維の「民族的自覚」は魯迅と比し遜色がないことが述べられている。
- 20 「側身天地苦拘孿、姑射神人未可攀。雲若無心常淡淡、川如不競澗潺潺。馳懷敷水条山裏、托意開元武徳間。終古詩人太無頼、苦求樂土向塵寰。」(『静庵文集』「静庵詩稿」) 趙万里『王静安先生年譜』(年譜叢書、広文書局、1971。)によれば1899年の作である。
- 21 「將赴成都草堂途中有先寄嚴鄭公五首」の五に「錦官城西生事微、烏皮几在還思歸。昔去為憂乱兵入、今來已恐隣人非。側身天地更懷古、回首風塵甘息機。共說總戎雲鳥陣、不妨遊子芰荷衣。」(『杜詩詳注』中華書局、1979。杜甫の底本は以下に同じ。)
- 22 「藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若冰雪、綽約若処子。」(『南華真經』四部叢刊、上海商務印書館、1936。)
- 23 「歸去來」に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。」(『文選』卷四五、四部叢刊本)、「江亭」詩に「坦腹江亭暖、長吟野望時。水流心不競、雲在意俱遲。寂寂春將晚、欣欣物自私。故林歸未得、排悶強裁詩。」
- 24 「有歎」詩に「壯心久零落、白首寄人間。天下兵常鬪、江東客未還。窮猿号雨雪、老馬怯關山。武徳開元際、蒼生豈重攀。」
- 25 宮内保「王国維の『人間詞』について」(『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』講談社、1979、996頁。)
- 26 拙稿(注2に前掲)参照。
- 27 出典は注16前掲に同じ。
- 28 Fritz Strich注7前掲書以前にも、同著者論文に、Goethes Idee einer Weltliteratur. In Fritz Strich: *Dichtung und Zivilisation*. München, Meyer & Jessen, 1928, S.58-77. Weltliteratur und vergleichende Literaturgeschichte. In *Philosophie der Literaturwissenschaft*. Emil Ermatinger hg. Berlin, Junker und Dünhaupt, 1930, S.422-441. があった。シュトリヒの説は「世界文学」が「文学」であることを全面的に否定するものではないが、文学作品のみならず文学の創作活動や、さらにはその受容や批評活動や翻訳をも内包させた解釈はその後の研究者にも支持されている。たとえば日本では、新関良三「ゲーテの世界文学理念について」(『ゲーテ年鑑』第1巻、関西ゲーテ協会、1955。)、同著「ドイツ文学とカーライル—再びゲーテの世界文学理念について—」(『共立女子大学文学部紀要』25、1979。)、橘忠衛「ゲーテの〈世界文学〉」(注15前掲)が挙げられる。
- 29 王国維によって翻訳された日本書は、修斌・陳琳琳「王国維と日本人学者の交流—藤田豊八・田岡嶺雲・桑木巖翼を中心に—」(『環東アジア研究センター年報』4、2009、140~141頁。)を参照されたい。またその他には、ジェボンズ(英)「辨学」(『教育世界』1908。原書名はWilliam Stanley Jevons, *Elementary Lessons in Logic: Deductive and Inductive. with Copious Questions and Examples, and a Vocabulary of Logical Terms*. 1886。)、シジューイック(英)「西洋倫理学史要」(『教育世界』1903。原書名はHenry Sidgwick, *Outlines of the History of Ethics for English Readers*. 1886。)などがある。
- 30 “Vorwort zu Schillers Leben aus dem Englischen von Thomas Carlyle.” Frankfurt, 1830. In *Goethes sämtliche Werke*. (注16前掲書) Bd.5, S.692. “Vorwort.”
- 31 Johann Peter Eckermann: *Gespräche mit Goethe, in den letzten Jahren seines Lebens*. (注10前掲書) Dritter Teil, S.454-455.
- 32 「致許同蘭(1898年5月上旬)」に「聞法人又拋馬江、直索船政局、德人又拋馬祖澳、(事利乃至膠州、而至福州。)不知確否。瓜分之局已見榜樣、如何如何!」(吳沢生編『王国維全集 書信』中華書局、1984、6頁。)とあり、ここでは特にフランスやドイツによる「馬江」および「馬祖澳」(ともに福建省閩侯県)の占拠に対する危機を述べている。
- 33 「論近年之學術界」に「然由上文之説、而遂疑思想上之事、中国自中国、西洋自西洋者、此又不然。何則。知力、人人之所同有、宇宙人生之問題、人人之所不得解也。其有能解此問題之一部分者、無論其出於本国、或出于外国、其償我知識上之要求、而慰我懷疑之苦痛者、則一也。(中略) 然則吾国今日之學術界、一面当破中外之見、(後略)。」(『静庵文集』)
- 34 王徳毅『王国維年譜』(台湾商務印書館、1967。)[叙例]に「觀堂一生、無意於政治活動、而為一純学者」(3頁)とあり。
- 35 ゲーテの周辺環境や政治への態度に関しては、坂井栄八郎『ゲーテとその時代』朝日選書、1996、小堀桂一郎「政治家ゲーテの外交感覚」

(『自由』10、1968、12。)、Wilhelm Mommsen: *Die politischen Anschauungen Goethes*. Stuttgart, Deutsche Verlags Anstalt, 1948.
に詳しい。